

# 津ライスニュース

## 平成28年産水稻 作柄報告版 (通算第109号)

平成29年2月8日

津地域農業改良普及センター

電話:059-223-5103

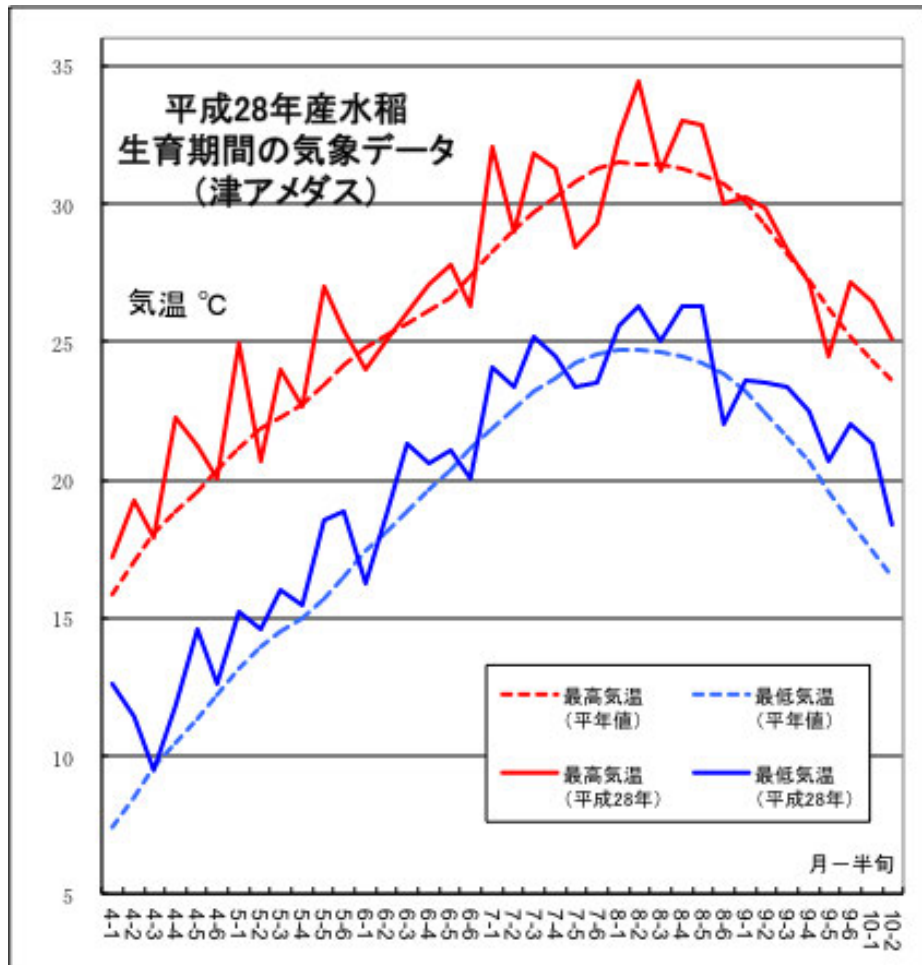
### 平成28年産水稻の作柄

作況指数105 (三重県及び中勢) の「やや良」

### 気象経過

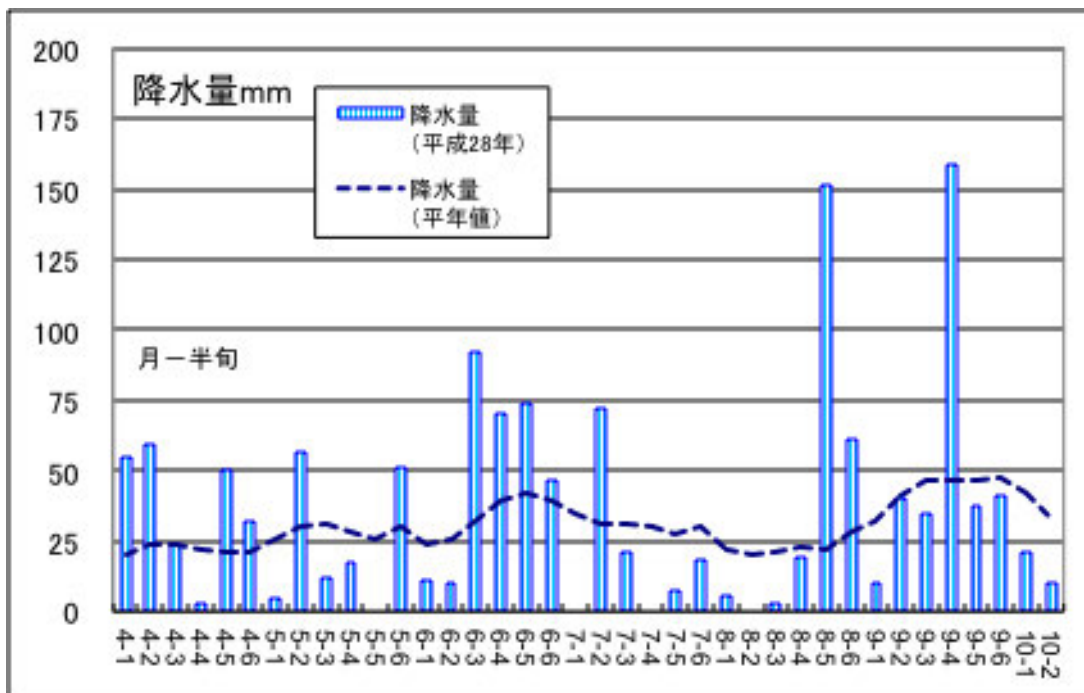
#### <気温>

7月下旬に一時的に平年を下回りましたが、4月から8月中旬にかけて高温傾向が続きました。8月下旬以降は、最高気温は平年並みとなりましたが、最低気温が高い傾向となりました。



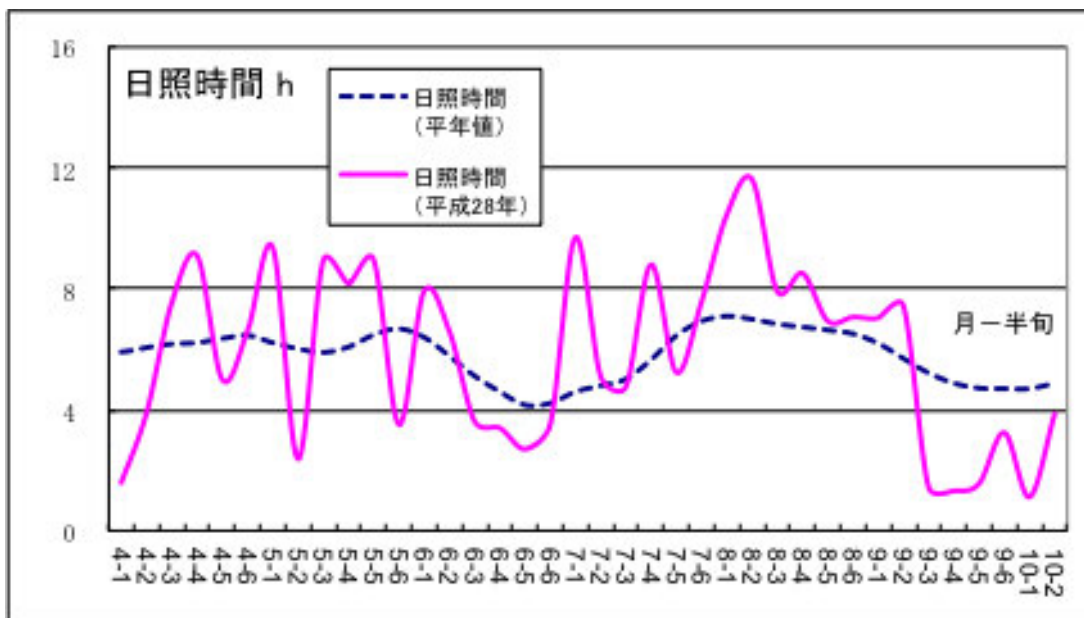
<降水量>

多雨と少雨を繰り返しました。特に、6月と8月中旬から9月は平年を大きく上回りました。また、7月中旬から8月上旬には降雨がほとんどない日が続きました。



<日照時間>

4月から5月にかけては平年並みでしたが、雨の日が多かった影響で6月と9月中旬から10月にかけては、平年を下回りました。一方、晴天が続いた7月下旬から8月中旬にかけては平年を上回りました。



## 生育経過

### <早期栽培の概要>

本年は3月以降、定期的に降雨があったことから、用水は確保されていて、代かき作業等は順調でした。また、4月以降平年を上回る気温で推移しましたが、極端な高温・低温はなく、育苗は、病害等の被害はほとんどなく、良苗が確保されました。

津管内の田植え作業は、早いところで4月中旬から始まり、概ね4月下旬から5月上旬にかけてピークを迎え、早期栽培の田植作業は順調に行われました。

本田での生育状況は、連休直前に植えられたほ場で強風による植え痛みが散見されましたが、気温の上昇に伴い、回復は早く、初期生育は概ね順調でした。

本田での初期生育は、高温傾向で推移したことから、平年より葉齢の進展はやや早く、草丈・茎数もやや多い状況となっていました。

6月中旬以降、雨が多かった影響で、中干し作業が進まないほ場が多く見受けられました。

7月中旬以降晴天が続く、降雨がほとんどない日が続きましたが、干害等の被害はほとんど見られませんでした。また、最低気温が高い日が少なかった影響で、高温障害は比較的少なく、登熟は順調に進んだと思われます。本年は、栽培期間中の台風の影響はなかったものの、高温傾向が続いた影響で、稈長がやや長く、倒伏がみられたほ場が散見されました。

出穂時期は、ほぼ平年並みとなりました。

8月下旬以降、雨が多かった影響で、収穫作業は遅くなる傾向がみられました。

早期栽培(4月下旬～5月上旬移植)の水稻は、比較的温暖に推移したことから、生育は栽培期間を通して順調でした。8月中に収穫を終えられたほ場では、収量は平年より多く、品質も高い傾向となりました。しかし、8月下旬以降、雨の日が多く、日照不足となった影響で、後半ほど品質・収量ともに低下する傾向となりました。また、山間地域では獣害被害も散見されました。

### <普通期栽培の概要>

普通期栽培の水稻では、育苗期間に高温・多湿傾向となった影響で、いもち病の発生が散見されました。

普通期栽培の田植え作業は、用水は確保されていて、概ね5月下旬から6月中旬にかけて順調に行われました。低温や強風による植え痛みもなく、初期生育は順調でした。

晴天が続いたため、中干し作業は順調に進み、出穂期は平年並みとなりました。高温傾向で推移した影響で稈長がやや長く、倒伏したほ場が散見されました。

8月下旬以降は、雨が多く、記録的な日照不足となった影響で、登熟不良が散見されるとともに、収穫作業が遅れ、収量・品質とも低くなる傾向がみられました。

### <生育基準田等の調査結果>

コシヒカリの生育を前年と比較すると、稈長・穂長・穂数ともに同程度となりました。また、出穂期は前年よりやや遅くなりましたが、ほぼ平年並みでした。

○水稻生育基準田の成熟期調査結果

【早期栽培：平成28年8月12日現在】

【普通期栽培：平成28年9月9日現在】

	品種	調査地点	移植日 (月.日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数		出穂期
						(本/㎡)	(本/株)	
早期栽培	コシヒカリ	殿村	4月21日	97	17.8	347	27	7月17日
		安濃	4月25日	83	20.5	262	18	7月19日
		一志町井生	4月29日	84	18.3	304	16	7月17日
普通期栽培	コシヒカリ	一志町高野	6月14日	81	19.8	259	16	8月9日

【参考】前年同時期の調査結果

【早期栽培：平成27年8月19日時点】

	品種	調査地点	移植日 (月.日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数		出穂期
						(本/㎡)	(本/株)	
早期栽培	コシヒカリ	殿村	4月21日	90	19.8	283	23	7月10日
		一志町井生	4月25日	85	18.2	424	22	7月20日

## 雑草

ほ場によってはホタルイ等の雑草が多発した場合も見受けられましたが、全体として目立った雑草の発生は見られませんでした。また、雑草イネは、防除の効果がみられ、去年と比較して、全体的には発生は減少したものの、一部で発生が目立つほ場も見受けられました。引き続き、適切な防除が重要となります。

## 病害虫

### <いもち病・紋枯病>

いもち病については、6月中旬以降定期的に感染好適条件が現れたことから、防除の徹底等呼びかけたところですが、穂いもちの発生に至るまでの被害はほとんどありませんでした。箱施用剤使用や、適期防除など引き続き啓発する必要があります。

紋枯病の病原菌は、ほ場内および近隣のイネ科・カヤツリグサ科雑草で越冬するため、冬季の畦畔雑草防除が必要です。また、紋枯病が発生したほ場では翌年の水稻作でも発生が多くなる傾向があるため、翌年の水稻作では適切な防除も重要となります。

### <その他の病害>

ごま葉枯れ病は、例年と同様にみえのゆめでの発生が目立ちました。

### <斑点米カメムシ類>

本年は、カメムシの発生時期がやや後半にずれたような傾向でした。水稻の生育途中、ほ場でカメムシは見られない傾向でしたが、収穫近くなってきたほ場では、カメムシの飛来が多く見られるようになり、斑点米の被害も多く見受けられました。

カメムシ被害対策として、ほ場周囲の荒廃地対策や草刈り、農薬の一斉防除など防除の徹底化が必要です。

### <ジャンボタニシ>

近年スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)の発生が問題になっており、津管内でも一部地域で発生が目立ちました。水口や水尻に金網またはネットを貼り、ほ場への侵入を防ぐとともに、発生した場合は、薬剤防除等の適切な防除が必要です。また、越冬場所を除去するための、排水路の泥上げや畦畔の雑草除去も効果的です。ジャンボタニシの防除には、地域全体で行うとより効果的です。



卵塊



成貝

### 収量

コシヒカリは、昨年と比べ大きく増収となり、屑玄米重も少なくなりました。しかし、千粒重は昨年より小さい傾向です。

#### ○水稲生育基準田の収量調査結果

	品種	調査地点	もみわら比	精玄米重 (kg/10a)	屑玄米重	玄米千粒重
					(1.85mm以下) (kg/10a)	
早期栽培	コシヒカリ	殿村	1.06	579	29.4	21.3
		一志町井生	1.00	504	11.7	21.7
普通期栽培	コシヒカリ	一志町高野	0.85	402	21.6	21.6

#### 【参考】平成27年産の収量調査結果

	品種	調査地点	もみわら比	精玄米重 (kg/10a)	屑玄米重	玄米千粒重
					(1.85mm以下) (kg/10a)	
早期栽培	コシヒカリ	一志町井生	1.01	389	30.3	23.4

### 品質

平成28年産米の農産物検査結果(農林水産省統計、平成28年12月31日現在)によると、水稲うるち玄米の等級比率は、三重県では1等62.2%と、全国(1等83.6%)と比べて悪くなりました。

品種別には、作付比率が高いコシヒカリで1等比率が特に低くなりました。2等以下に格付けされた主な理由は、割合の高い順に、「心白・腹白(白未熟粒)」「充実度」「着色粒(カメムシ類)」「整粒不足」となっています。9月以降の日照不足が登熟に大きく影響したものと思われます。

#### ○平成28年産水稲 生育基準田の分解調査結果

品種名	調査地点		精玄米重 (kg/10a)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	一穂粒数 (粒)	玄米千粒重	登熟歩合 (%)
コシヒカリ	一志町井生	H28産	504	304	60	21.7	85.7
		H27産	389	424	65	23.4	-
		H28/H27	130%	72%	92%	93%	-
	殿村	H28産	579	347	84.7	21.3	83.5
	一志町高野	H28産	402	259	86	21.6	79.8

○平成28年産米（三重県産）銘柄別検査結果

（農林水産省統計 平成28年12月31日現在）

	検査数量	等級比率			
	(t)	1等	2等	3等	規格外
水稲うるち玄米計	67047	62.2	36.3	1.3	0.2
コシヒカリ	52576	61.4	37.3	1.1	0.1
キヌヒカリ	4783	44.4	52.5	2.7	0.4
みえのゆめ	1921	66.6	30.2	2.9	0.2
三重23号	811	99.9	-	0.1	-
きぬむすめ	249	76.7	21	2.2	-

○三重県産コシヒカリの農産物検査結果

（農林水産省統計 平成28年12月31日現在）

	等級比率			
	1等	2等	3等	規格外
平成28年産	61.4	37.3	1.1	0.1
（全国）	(84.1)	(14.6)	(1.0)	(0.3)
平成27年産	46.1	50.7	3.1	0.1
平成26年産	32.3	63.6	4	0.1
平成25年産	36.1	60.3	3.4	0.2
平成24年産	52.7	45.9	1.2	0.2

<品質向上に向けた今後の対策>

○白未熟粒を発生させない

白未熟粒とは米の内部が白く濁るものであり、乳白粒、背白粒、腹白粒、基白粒などをいいます。等級を下げるだけでなく、品質面で消費者からも嫌われます。本年も白未熟粒（特に心白粒、腹白粒）が格付低下の要因の一つとなりました。

心白

腹白



白未熟粒軽減対策として次のことが考えられます。

① 登熟期の水管理

中干し以降は間断灌水に心がけ、落水は収穫7日前以降としましょう。

暑い日中は水温も高いので、夜間通水等により稲体を休める方が効果的です。

なお、近年の夏は少雨傾向であり、高温年には干ばつが懸念されます。渇水時の対応として、湛水でなくても湿潤な状態を保つことが可能であれば実施してみてください。

② 施肥管理(生育後半の窒素を高める)

生育後半の肥料不足が白未熟粒の原因となっています。穂肥の時期をやや遅め(1回目は出穂15日前頃)にし、高温年は2回目の穂肥をやや多めにしましょう。

幼穂形成期以降の溶出割合を高めた緩効性肥料も開発されています。また、堆肥の施用及び深耕により、作土を深くすることも効果的です。

○ 倒伏させない

草丈を抑制し倒れにくい稲を作るために、育苗の段階から次の項目に気をつけて作業をしましょう。

- 丈夫な苗の確保…茎が太く徒長していない苗を植えましょう。
- 適正な植え付け本数…太植えは茎数過多となり、茎が細くなります
- 適正な基肥量…窒素過多は生育過剰となります。
- 適正な水管理…こまめな水管理(間断灌水)と中干しにより田面を硬くします。
- ケイ酸資材の施用…ケイ酸を吸収させると光合成能力が高まり、稲を丈夫にします。
- 紋枯病防除…株元を枯らす紋枯病は倒伏につながります。

○ 籾数を抑える

前半の生育を抑制して、籾数過多を避けましょう。そのためには特に幼穂形成期以降の肥培管理や水管理が重要です。穂肥が早すぎると籾数過多となりやすいので、栽培こよみや生育状況を見ながら、適正な時期に適量を施肥するようにしましょう。